

## 第2回 沼津港の将来を考える有識者会議 議事概要

---

日 時：平成27年2月5日（木）午後15時00分～午後17時00分

場 所：若山牧水記念館

出席者：

（委員）

一般財団法人みなと総合研究財団顧問 大村 哲夫（会長）

公益社団法人沼津牧水会理事長 林 茂樹

東京工業大学大学院社会理工学研究科教授 齋藤 潮

※東京女子大学 竹内教授は欠席

（策定委員会）

東海大学海洋学部環境社会学科教授 東 恵子

（行政代表）

静岡県副知事 難波 喬司

沼津市産業振興部長 高橋 強

事務局：静岡県交通基盤部港湾企画課

配布資料：

- ・次第
  - ・委員名簿
  - ・座席表
  - ・有識者会議設置要項
  - ・沼津港の将来を考える有識者会議（説明資料-1、2）
- 

### 【第二回策定委員会の報告について】

（大村）

- ・ 発表者の方が沼津を誇りに思い、沼津にあるものを活かしてやっておられることは素晴らしい。
- ・ 情熱を持った人の意見を上げていく際に、マスコミを使って外部へ発信すると、地元の人も沼津の良さを再認識するため効果的である。広報は市が重要な役割を担っている。
- ・ 沼津の魅力の中で、食の魅力をもっと打ち出していくほうが良い。食材はいいものがあるので、腕のいい料理人で魅力を高めていく。腕のいい料理人の育成支援などやるといいのでは。

（林）

- ・ 発表を傍聴して沼津を愛してくれていることが伝わった。これからは楽しみである。

- ・ 発表者の熱意に対して市が応えてくれているかは疑問である。特に香貫山への道の整備は不十分。
- ・ 沼津港とはどういう港であるかを考えたときに、伊豆とのつながりが希薄になっていると感じる。(沼津港から西海岸への船のつながりがなくなったことから。)

(齋藤)

- ・ 観光客だけでなく、地元の方々へも気持ちを向けることが大事である。
- ・ 食を魅力とするなら、いい食材を使って創意工夫をし、食の魅力を追い求める。そのような施策を県や市が打ち出してもいい。

(東)

- ・ 地産地消のものに継続性がないと感じている。沼津ブランドを継続できる支援が必要。

(難波)

- ・ 沼津市は変わりつつある。市民プロデュース課の設置の検討を進めており、住民意見が前に出やすい環境づくりに積極的に取り組んでいる。

(高橋)

- ・ 沼津港のみが賑わっている状況の中、沼津を愛してくれている人々とともに情報発信に力を入れている。

## ■沼津港の将来像について

(大村)

- ・ 資料の「活力がつながる」という言葉から具体的なイメージが湧かない。
- ・ 資料の中の言葉をもう少し精査し、イメージしやすい将来像を設定する。
- ・ キャッチコピーはすぐに情景が浮かぶような動きのあるものもいい。つけるのは最後でもいいのでは。
- ・ 資料の中の地域住民が集うという像は、10年後というよりは1年後の像でもいい。

(林)

- ・ 沼津港と他の地域との連携が希薄となっている。昔は、買物で沼津へ行く、通学で沼津へ行く等、周辺地域の核となるのが沼津港であった。「食だけの沼津港」ではなく、別の核を持った沼津港にしたい。
- ・ 10、20年後の舟運の復活の可能性も視野に協議を進めたい。

(齋藤)

- ・ 素晴らしい景色でうまいものを食べる。景色と食材を繋げるのが沼津港では。
- ・ それぞれの観点が全て 10、20 年後の姿でなく、ズレを作ってもいい。何か一つが先行してもいいのでは。

(東)

- ・ 人々の交流、創作が重要。地域住民が集う場も必要だが、現在の観光客が多く訪れることも魅力であるので、現在ある魅力（沼津港でしか見れない松や富士山等）も将来像の観点として加えていただきたい。
- ・ 沼津港の利用者として、観光客がメインである中で、いかに地域住民の利用を融合できるかが課題である。

(難波)

- ・ 舟運の発達によって、文化や情報が伝えられていたことは事実だが、時代として舟運を復活させることは難しい。違った方向で見出していくべきである

(高橋)

- ・ 現在の沼津港の周辺は観光客が多く、市民の方が利用する場としては違う雰囲気がある。

## ■沼津港の機能について

(大村)

- ・ 「場の力」は写真等で集約したほうがわかりやすい。「人の力」も市民の方の意見を聞いたことを集約し紹介すればいい。そのほうが温かみがある。

(齋藤)

- ・ 資料の説明順序で「将来像→機能→機能を発揮する方策」ではなく、「将来像→将来像を実現するための方策」という順序が正しいのではないか。
- ・ 資料の中で機能の細分化はこの場では必要ないのでは。

(東)

- ・ 沼津港に欠かせないものとしてびゅうお、狩野川、香貫山等をあげていただきたい。それをどのように活かしていくかというのが「場の力」である。同じく、前回の策定委員会の発表者、港で働く人々、観光客、地域の子供達が「人の力」であり、それを最大限に発揮するための具体策を考えていくべきである。機能として考えると沼津港らしさが出てこない。

(難波)

- ・ 「場の力」「人の力」は機能ではない。将来像を目指す上で最大限に活かすということが重要である。

## ■方策を展開する場について

(大村)

- ・ これまで沼津港のあるべき姿を議論してきたので、そのあたりの具体策を落とし込んでいけばいい。今の資料の順序としては「再編」が目的のようになってしまっている。

(齋藤)

- ・ 港の機能は一对一の対応ではなく、総合的に孕んでいくものである。例えば親水空間での子どもの教育、びゅうおでの飲食など。今の資料は細分化し個別化しすぎているので、一つの結論にまとまって終わりということになりかねない。

(東)

- ・ 沼津港を空間の土地利用や機能でまとめるのではなく、「場の力」「人の力」がどこでどのように展開できるかを記載すべき。
- ・ 沼津港の利用者として、観光客がメインである中で、いかに地域住民の利用を融合できるかが課題である。

## ■今後の対応

(事務局)

- ・ 委員の意見を踏まえたうえで、表現方法を会長と調整させて頂き、次の策定委員会につなげる。
- ・ 「場の力」「人の力」についても、今あるものをどのような形でまとめあげていくのかを策定委員会の中で議論し、イメージを固め整理する。
- ・ 住民からの意見については、パブリックコメントを実施し、意見を取りまとめさせて頂きたいと思っている。